

第 12 回 (2008 年度) 認定輸血検査技師試験の結果

平成 20 年 9 月 11 日

認定輸血検査技師制度

協議会	会長	高松純樹
審議会	会長	浅井隆善
	試験委員長	田崎哲典

1. 受験者数

- ・申請者 321 名中、欠席者 13 名で、実受験者は 308 名であった。
- ・実受験者中、新規受験者は 139 名 (45.1%)、再受験者は 169 名 (54.9%) であった。

2. 試験結果

1) 筆記試験

- ・最高点 : 88.0 (85.6)
- ・最低点 : 40.0 (42.6)
- ・平均点 : 63.2 (64.1)
- ・中央値 : 62.7 (64.8)

2) 実技試験

- ・最高点 : 94.5 (98.1)
- ・最低点 : 0 (0)
- ・平均点 : 45.9 (45.1)
- ・中央値 : 46.8 (49.4)

() は 2007 年の成績

3. 総合判定

- ・実受験者 308 名中、合格者は 71 名 (合格率 23.0%) であった。
- ・受験科目別受験者数 (合格者数、合格率%) は以下のごとくであった。

筆記+実技 : 205 名 (27 名、13.1%)

筆記のみ : 17 名 (9 名、52.9%)

実技のみ : 86 名 (35 名、40.7%)

4. 試験概要と成績について

1) 試験概要

2008 年度試験は、8 月 23、24 日、横浜市立大学医学部を会場に行われた。例年この時期、台風や猛暑が心配となるが、今年は比較的気候も穏やかで、2 日間の試験は予定通り順調に終了した。300 名を越える受験者であったが、1 回で行うことができたので、冬季試験は行わない。なお上記の如く、欠席者は 13 名であったが、そのうち 10 名が 3 回目の受験予定者であった。次回は新規受験者扱いとなるので、筆記、実技ともに十分に勉強されて試験に臨んで頂きたい。

2) 試験成績

全体の合格率は 23.0% (71/308) で 2007 年 (27.1%、85/314) より若干低下した。「実技のみ」、或は「筆記のみ」の受験者の合格率が高く、「実技+筆記」の受験者で低かったが、この結果は例年と同じである。新規受験者においては特に輸血検査の技術、知識、及び問

題の解決能力を高めて試験に臨んで頂く必要がある。

5. 試験科目別評価

1) 筆記試験

平均点±SDは、 63.2 ± 8.9 、合格基準値以上の得点者は43.2% (96/222)で、図1の如く得点別の人数分布も昨年とほぼ同じであった。96名中66名(68.7%)は新規受験者であり、しっかりと勉強すれば初回でも合格できることを示している。試験問題は輸血に関する全ての分野から出題されるので、一夜漬け的な準備では対応できない。正答率も例年どおりで、○×式や穴埋め問題は70%を越えていたが、計算や臨床問題では30%程度と、著しく低い。計算問題は全て基本的なものばかりであり、中学生レベルの数学で解けるはずである。臨床問題も輸血に関与する者、特に認定輸血検査技師としては当然、知っておかねばならぬ内容である。これらの正答率が上がれば、更に合格者も増えると思われる。

2) 実技試験

平均点±SDは 45.9 ± 22.8 、合格基準値以上の得点者は24.3% (71/291)で、昨年よりやや低下した。得点者分布は図2の如くで、11名は3科目とも0点であった。実技の平均点は、「実技のみ」の受験者が56.5点であったのに対し、両科目受験者では41.5点と、10点以上の差が生じていた。また実技が及第点の71人中、新規受験者は22名(31%)で、筆記試験結果とは大きく異なっていた。このような背景もあり、後述の如く来年度からは新規受験者を対象に一次試験が導入される予定である。

<血液型> 平均点は100点満点で51.6点と昨年(50.5点)とほぼ同じであった。血液型の検査が正しく出来ない者に輸血検査を任せるとはできない。結果の正しい記載と判定、解釈が基本であり、更に認定輸血検査技師には表裏不一致のような問題が生じた場合の解決能力が求められる。その際、単に知っている方法を羅列するのではなく、重要性を考慮して記載する必要がある。また実際の輸血ではどのような血液の使用が望ましいかを、臨床側に伝えねばならない。試験ではこれらを順番に尋ねているだけである。答案から推察するに、難しく考えすぎている受験者が少なくない。抗D試薬に凝集を示さない場合、Delを第一に考えるだろうか。輸血も直ちにO型を使用するであろうか。検査も血液製剤の選択も状況を考慮しての対応が必要である。

<抗体> 全体の平均点は100点満点で40.5点で、「実技のみ」の受験者の58.2点に比し、20点近くも低い。新規受験者の奮起を求めたい。毎年の事ながら、「可能性として最も高い抗体」が不正解となるようでは困る。これに関し、「消去法」にも慣れておく必要がある。実際の手技を見ていると、抗体の解離液を得るまでに30分以上かかったり、操作がぎこちない受験者や、終了間際まで遠心機を回し試験管を振るなど、習熟度の差を感じる光景は例年と同じであった。

<カラム> 血液型や可能性として最も疑われる抗体が不正解では、大きく減点される。今回はカラムの大減点が最終結果に影響した受験者が散見された。カラムは比較的得点し易い科目と考えて、或は他の2科目で点が得られれば合格できるとして、準備が疎かになったためであろうか。何れにしても不合格の通知を受け、不良科目としてカラムのみが対象となった受験者は合格に近い成績であり、次回これをクリアすれば合格となろう。その

他、誤字や脱字、輸血でよく使用される用語で記されないなど、本法に不慣れではないかと思わせる答案も少なくなかった。

6. まとめ

今回で通常認定試験も 12 回目である。過去 5 年間、合格率は 30% に届かず、今回も 23% と低い。筆記、実技とも怪情報に振り回されているのではないかとの答案に遭遇することがある。筆記は出来ていても、実技が著しく不良であったり、或はその逆もある。また実技 3 科目においてバランスが著しく悪い受験者も散見される。このような場合、検査技師として日常、輸血にどのように関わっているのかが気になるところである。その他、要因は様々であろうが、試験で求めているのは輸血検査に携わる者の基本的な知識と技術であり、かつ認定技師としてのレベルの高い正確さ、迅速さ、そして問題解決能力である。それらは既に、「会告 V 認定輸血検査技師制度実技試験の評価基準について (52 巻 1 号)」、「会告 VII 認定輸血検査技師の技術に関するカリキュラム (50 巻 5 号)」、及び毎回の試験講評に記されている。基本的で重要な問題は繰り返し出題され、試験結果には受験者のレベル、及び実技試験においては不合格の場合、どの科目が出来なかったのかも明示している。しかし実際は合格率が示すように、なかなか成績が芳しくない。

前回の試験の講評や「2008 年度認定輸血検査技師受験申請の手引き」にも示されているが、実技試験の受験者数が 300 名を越えていること、知識、技術共に合格ラインからは遙に遠い受験者が参加されていること、等を考慮し、来年度から新規受験者を対象として一次試験の導入を検討している。詳細は、2009 年度の手引きを参照されたい。

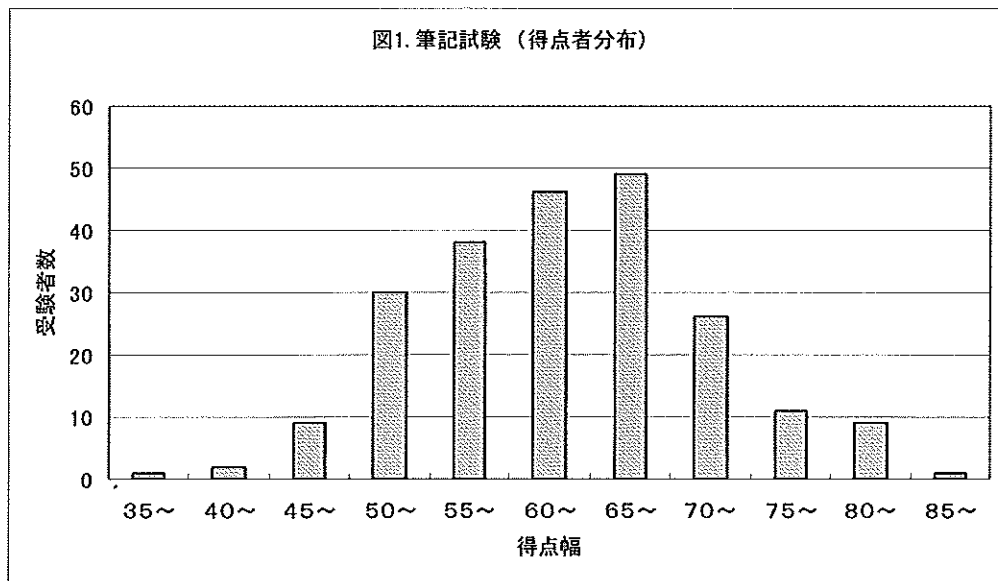


図2. 実技試験 (得点者分布)

